



## 子どもたちの人権感覚を育てる

今年も「人権週間」がやってきました。「人権週間」とは1948年12月10日国際連合の総会で「世界人権宣言」が採択され、この日を「世界人権デー」と定めたことにちなんで始まりました。日本もこれを受けて、毎年12月10日の「世界人権デー」を最終日とする1週間(12月4日～10日)を「人権週間」と定め、人権尊重のための啓発活動を全国的に展開しています。

さて、人権週間にちなんで、「人権感覚を育てる」ことについて考えてみましょう。

人権感覚を育てるということは、「目に見える行為の陰には、どんな気持ちがあるのだろうか」ということを考え、「目に見えない思いに気づく心を育てること」ではないかと思えます。

ここで2つの話を紹介します。

一つ目は、沢村貞子さんの著書「老いの楽しみ」(ちくま書房)からです。

あれは、私が小学校二年生の時だった。先生から渡された全甲の通信簿をしっかりと抱えて家へとんで帰った。いまのオール5—私は得意だった。台所で煮物をしている母に、

「あのね、今日、先生にほめられたのよ、私は特別よくできるって・・・ホラ、見て」

そう言ったのに、「へエ、そうかい」と言っただけで振り向いてもくれない。つい、

「・・・できない子だって大ぜいいるのよ。ホラ、左官屋さんちの初っちゃんなんか、この間も算術ができなくて、先生にうんと叱られて・・・」とたんに振り向いた母は、

「つまらないこと、お言いでない。人間、学校の勉強さえできれば、それでいいってわけじゃないだろう。初っちゃんは、算術は下手かもしれないけど、小さい弟たちの面倒をよくみるし、ご飯の支度だってお前よりずっと上手だよ。人それぞれ、みんな、どこかいいところがあるんだからね。先生にちょっとほめられたくらいで、特別だなんて、いい気になるんじゃないよ。みっともない」

母は本気で怒っているように見えた。叱られたことはめったになかったのに・・・。

(母さんの言うとおりかも知れない。初っちゃんは優しくて親切で、私も大好きなのに、悪いこと言っちゃって・・・)

急に恥ずかしくなった私は、握りしめていた通信簿をそっと背中に隠しました。特別という言葉が嫌いになったのは、その時からのような気がする。

もう一つは、中学時代不登校だった女子生徒の話である。「心に残るとっておきの話」潮文社編集部編より

夜になり、母から通知表を受け取った私は、自分の部屋に戻ってそれを見た。1学期間、まったくテストを受けていなかった私には、当たり前のように学習評価はされておらず、空白のままだった。書いてあるのは担任の所見の欄だけだった。

私は、どうせ、また、説教じみたことでも、つらつらと書かれているのだろう、半ば決めつけながら、その文章を読んだ。そして、しばらくの沈黙が流れた後、私は泣いていた。ごく自然に涙があふれていた。そこには、こう書かれてあった。

「つらくたって 悲しくたって いろいろあったほうがいいじゃないか 人生には」

それまで生きてきた中で、これほど心に直接流れ込んできた文章はなかった。嫌いだ、嫌いだ、と、ずっと思ってきた、人間という感情の動物が書いた文章に、私は涙していた。

このように大人からの言葉かけや行動は、自分の存在をどのように思っているのかを感じとらせる力があります。日々の小さな言葉や行動の積み重ねが、子どもたちに人権感覚を育てることにつながるのではないのでしょうか。

我々大人は、将来子どもたちが、お互いを尊重し合う明るい社会を築くことができるよう、同じ気持ちを持って、「見える言葉や行動」で、子どもたち一人一人に「みえない心」を育てたいものです。

## 二小児童の頑張り 各種表彰

- 第20回智恵子のふるさと小学生紙絵コンクール  
佳作 4年 伊藤木乃香 2年 山寺瞬佑
- 第61回青少年読書感想文福島県コンクール  
佳作 6年 岡本 翼
- 平成27年度岩瀬地区造形展  
県推奨 1年 伊藤幹太 2年 稲田 鈴 3年 鶯沼レオ 4年 安齋朴音 5年 近藤亮真
- 平成27年度岩瀬地区小中学校音楽祭(第3部創作)  
特選 6年 堺 千浩 村田亜弥 紛澤和佳 4年 平原由唯 紛澤京奈  
金賞 6年 山崎琴美 5年 熊田 栞
- 第51回岩瀬地区書写コンクール  
研究部長賞 5年 熊田愛永  
推 選 1年 井上愛徠 関根堇花 石堂夏帆 2年 齋藤美希 箭内裕樹  
3年 高橋真惟 山寺優芽 4年 荒井愛琳 車田彪流  
5年 高橋美那 6年 長場由芽 山下奈々 須田日菜子
- 須賀川間税会平成27年度「税の標語」  
会長賞 5年 柳沼花音 入 選 6年 駒場萌風
- 平成27年度(須賀川地方)火災予防絵画・ポスターコンクール  
入選 5年 行方和香
- 須賀川地区交通安全ポスターコンクール  
優秀学校賞 最優秀賞受賞者 6年 根本京次郎  
優秀賞 4年 高橋心優 5年 柳沼花音  
佳 作 1年 小野菜々子 2年 田中ちひろ 3年 佐藤 詩
- 「家族のきずな」エッセイ 須賀川モラロジー主催(5年生対象)  
岩瀬地区PTA連合会長賞 5年 滝田裕夏 モラロジー研究所賞 5年 村山 南 滝田 昂  
入選 5年 関根 直央 長沼百花 鈴木遥菜



### 「きずなの材料」

5年2組 滝田 裕夏

家族がいてくれたから自分がある。私は時々家族とけんかをする。でも必ず仲直りをする。私が生まれてからずっと4人家族でいろいろな思い出をつくってきた。うれしいことも、悲しいことも、楽しいことも、いやなことも数えきれない私たちの思い出は、私たち家族の「きずな」のあかしになっている。

私がここまで成長するまでに、お父さん、お母さん、そしてお姉ちゃんの力を借りていた。一生懸命働いてくれているお父さん。ご飯を作ってくれたり明るい家庭をつくってくれたりしているお母さん。たくさん遊んだりけんかもしたりしているお姉ちゃん。私が具合が悪くなった時も心配してくれた家族のみんな。みんなで支え合って数々の思い出を作ったり数々の困難を乗り越えたりしてきた。

けんかしてもすぐ仲直りできること、みんなで助け合うこと、これからも明るい家族でいること。今までの一つ一つの積み重ねは、今の大きな「きずな」を作っている。

※「家族のきずな」エッセイ出品作 岩瀬地区PTA連合会長賞受賞

### 「10秒の愛」

子どもって、忙しいときに限って、寄ってきます。

子どもって、なかなか さっとできません。

子どもって、なかなか はっきりと言えません。

でも たった10秒でもいいのです。まず子どもを抱きしめてあげてください。

たった10秒でもいいのです。「早く！」って言う前に待ってあげてください。

たった10秒でもいいのです。せかさずに、じっと聞いてあげてください。

すると、そこに「笑顔」が生まれます。

そこに「つながり」が生まれます。

たかが10秒、されど10秒。

「10秒の愛」は子どもを幸せにするのです。

(西宮教育委員会人権教育資料より 仲島正教著)

忙しい毎日の中で、ややもすると忘れがちな子どもとの「ふれあい」について、10秒だけでも真剣に向き合い、子どもとの心の絆を、しっかりと深めようという言葉です。

